学園レイ

阿万之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学園レイ

【Ｎコード】

Ｎ５００９Ｙ

【作者名】

阿万之

【あらすじ】

佐藤茂は転校先の学校で怪奇な事件に遭遇する。茂は新しくできた仲間と屋上限定の女幽霊と共に奇怪な事件に挑む……！

?

学園に霊の話が出てきたのは、佐藤茂が転校してきて直後のことだった。当時彼は新しい学び舎に慣れていなく、友人も少なかった。隣にいた橘奈央が唯一の話相手だった。その彼女がだんだんと邪険になってきたとき、そんな噂を耳にしたのだ。それは茂が腹痛に襲われてトイレの個室に駆け込んだときだった。風邪気味だったからか、軟化した便が勢いよく出てきた。尻を拭いて便を流す。すっきりした。学校のトイレで大便をするという行為は嫌なものだが、この狭い個室はなんとなく落ち着く。前の学校とは違い、ここは洋式で、落ち着いた空間になっている。それでもどこか汚いイメージのある場所に用を終えてから長居はしたくない。ズボンを上げ、出ようかと思ったら誰かが入ってきた。二人組みのようだ。小用を足しにきたのだ。尿を便器に流しながら喋りあっている。たわいのないことを話している。茂は出るに出られない。知った顔ではないかもしれないが、大便をしたということをばれたくない。

「知ってるか？　最近、校舎に女の霊が出るらしい」

茂の耳が反応した。

「ああ？　何だよそれ」

「だから霊だよ霊。女の霊が出るんだって。結構見たやついるんだよ。うちのクラスのやつだって見たっていってるし」

「くだらねえ。俺、霊なんて信じないよ」

「どうでもいいけどね、お前如きが信じる信じないは」

二人組はトイレを去った。残った茂は少し間を空けて個室から出、外廊下に出た。今の二人の会話を思い出す。馬鹿らしい、と思うが、なんとなく気になった。霊というものがいるとしたら、見てみたいもだと前々から思っていた。学校の霊か。どうせ何かを見間違えて、話に尾ひれがついたんだろう。結局すべての事柄に説明はつくものなのだ。

クラスに戻ると佐藤蓮華（れんげ）が話しかけてきた。蓮華という変わったというか、妙な名前を持つ彼は茂の新しい学び舎の、数少ない話相手の一人だ。橘奈央とは反りが合わないようで、彼女と茂が話しているときはこちらには近づかない。名前こそ変わっているが、ごくごくありふれた平凡な生徒だ。顔も、体つきも。性格も地味で、ゲームが趣味。

「どこいってたんだ？」

「ちょっと催して。トイレだよ」

蓮華はにやりとした。

「何？」

「いや茂は度胸あるな。一人でトイレなんて。俺ちょっと怖いよ」

「何が怖いって？　たかがトイレにいくくらい」

こいつは小学生かと茂は呆れた。

「最近の噂知らないわけじゃないだろ？　霊だよ」

なるほど合点がいった。しかしそれにしても……情けない。

「幽霊なんていないよ」

蓮華の顔は深く、暗かった。

「わからないよ」

それだけいうと、蓮華は茂から離れていった。茂のよく知らない仲間たちの輪に合流する。

茂はどこか変な蓮華の行動を考え、そして霊のことを考えた。ちらりと横を見る。橘奈央は澄ました顔で携帯電話をいじっている。じっとみていると目があった。

「何よ？」

奈央の顔は窓から射す光によって輝いて見えた。茂はふと思った。奈央のことが好きなのかもしれない。奈央は……可愛いかもしれない。白さの中に赤みがかかる淡い白色の肌は美しかった。

「幽霊って信じる？」

「馬鹿じゃないの」奈央は再び携帯をいじりだした。

女子ではこんなのしか話す相手がいないのだ。まったくもって切ない青春だ。せっかくの高校生活だというのに、彼女どころか友達すらまともにできずに終わるのだろうか。憂鬱な気分になる。幽霊よりも、辛い現実のほうが怖い。

「でもみんな噂してるじゃん」再び奈央に話しかける。

「茂君は噂話をいちいち本気にするの？」

「そうじゃないけどさあ、でもほら、火のないところに……」

「そういうのきもいからやめて」

茂の言葉は途中で遮られた。

「何が？」

「ことわざみたいなの。うざい」

茂は面食らった。この程度でうざい呼ばわりだ。

「慣用句くらい使ってもいいじゃんよ」

「気持ち悪いの。お願いだから死んで」

死ぬかよと茂は心の中で思った。奈央はまた携帯をいじりだした。どうやら自分は奈央に受け入れられてないらしい。生理的に受け付けない、というやつだろうか。友達もいない。隣の席の娘は冷たい。いいところなしだ。

?

学校が終わると自転車で家まで帰る。家からはさほど離れていない。今日も退屈な日だった。明日もそうに違いない。家に帰りゲームをしながら、隣の席の女子に好かれる方法を考えた。やはり、一人で孤独でいるのが薄気味悪く思えるのだろう。

だけど死んでは酷くね？

結局もやもやした気分のまま夜を明かした。

次の日、憂鬱な学校を休もうかと思ったが犬が元気なのでつい登校した。飼っているマサヒトはなかなかに愛嬌のある雑種で、愛くるしいその姿を見ていると気分がよくなった。自分でも単純だと思いながら自転車をこぎ、そしてクラスにきてまわりが騒いでいるのを見ると途端に憂鬱になった。お前ら何がそんなに楽しくて生きてるんだ？　席に座る。隣には奈央の姿はない。どこかで女子たちの輪に入っているんだろう。

不気味なほど退屈な時間はホームルームが始まるまで続いた。今日は蓮華もこなかった。

蓮華とは話す相手ではあるが、プライベートで遊んだことは一度もない。

昔の友人に頼ろうかと茂は考える。が、別の県に転校をした彼に頼れる者はいない。小学校、中学校の仲間とは疎遠だった。

ため息しかでない。死ぬほど退屈で孤独だ。

昼休みがくる。なんとなく、屋上で食べてみたくなった。なので弁当を持って屋上へ。屋上の階段を上がる途中、不良とすれ違った。名前は知らないが、同じ学年のやつだ。金髪で目つきが異様に悪い。まるでこの世の全てを否定しているような、悪鬼のような目だ。背も高く体もしっかりしている。喧嘩したらまず勝てないだろう。風を切るように階段を下りてくる。

「よぉ」

「やぁ」
とっさのことだった。その不良学生に挨拶されたようなのでそう返した。驚いて振り返ると、その生徒は振り返ることなく悠々と階段を下りていった。
大した意味はないんだろう。一人だけでいるやつに挨拶しただけだ。だけど……だけどどこか新鮮で、嬉しい気持ちがあった。屋上にきてみるもんだなと思ったりもした。

そして次の日も屋上へ。日は照っているが、風が強く吹いていて逆に気持ちよかった。町を見下ろしながら弁当を平らげる。悪くない。教室よりにいるよりもずっと気分が落ち着く。
「やっほう」
誰かに声をかけられた。振り向くとそこには女性徒がいた。黒々とした黒髪を三つ編みにした少女が一人、にこやかな笑みを浮かべて立っている。
一度にいろいろなことを思った。
この女、ここで何をしているんだろう？
結構可愛い子だな。睫がずいぶん長い。鼻は高いな。
女子にしては背高いな。俺と同じくらいか。
いい太ももだな。パンツ見えないかな。
「どうも」控えめな挨拶を返す。
「こんなところで何してんの？」
女が何者なのかわからない。クラスの女子全てを把握しているわけではないが、こんな女子はいなかったはずだ。そこそこ、いやかなり可愛いし、すぐに気づくはずなのだが。
「外の風に当たりたくて」
「ふうん。でもちょっと風強すぎると思うよ」
「えっと、よかったら名前きいてもいいですか？」
相手が年上とも限らないから敬語で尋ねる。
「私？　河添薫（かわぞえかおる）だよ。知らない？」

知らない。誰だよ。
「薫ね、ずっとこの屋上にいるんだけどね。昨日も君いたよね？ちょっと一人でさびしそうに見えたよ」
昨日いた？　昨日は不良とすれ違ったけど、屋上には誰もいなかったはずだ。
「昨日は俺一人だと思ったんだけど」
「いたんだよ。姿隠してたからわかんなかったよね。結構臆病だから、私」
ふぅんと茂は思う。姿を隠すっていうのがなんとなく滑稽で笑えたが、顔には出さなかった。
「君は何年生なの？」
「二年生です。あ、俺、佐藤茂っていいます。薫さんは三年生ですか？」
これで一学年だったらなんだか恥ずかしいなと茂は思う。
「あたしは三年生だよ。もっとも、それはあんまり意味のないことだけどね！」
どういうことだろう。学年よりも経験がとかそういうつまらない意味だろうか。
「薫さんもここで食事を？」
「食事っていうか、ここがあたしの全てだから」
よっぽど屋上が好きなんだろうと茂は解釈した。しかしこの人はなんでこっちに話かけてきたんだろう。嬉しさの反面、戸惑いも感じる。
「昨日は不良君もここに遊びにきてくれたんだよ。章吾って名前なんだけど、彼、普通じゃないね」
何がだろう。見た目がだろうか。
「茂君。この学校には慣れた？」
「俺が転校してきたって知ってるんですか？」
「まあね。登校する生徒の顔は把握してるし……その様子だとあんまり友人に恵まれてなかったりする？」

やはり、屋上で一人こんなところで弁当を食べている自分は端から見れば孤独な少年にか見えないだろう。事実そうだ。
「大丈夫。仲間はまだまだたくさんいるよ」
励ましてくれているんだろうか。別にいいのに。だがどこか信じる気持ちになれる。不思議な気分だ。希望のようなものが芽生えてくる。
「ありがとうございます。もう時間だし、そろそろいかないと」
「明日もきてよ。一緒に話したいし」
女子にこんなことをいってもらえたのははじめての経験だった。

その日の午後はずっとぼんやりと薫という生徒のことだけ考えていた。隣にいる奈央のことも気にならなかった。話しかけてうざいと思われるような女子はいないと思ったほうがいいし、実際に茂は奈央のことが気にならなくなった。
明日も屋上で薫さんとランチを取りたいなと茂は夢想にふけった。
夢想は現実となった。
次の日、屋上に向かう。ひょっとしたら薫はいないかもしれない。孤独な自分が創った妄想かもしれないし、からかわれただけかもしれない。
だが階段を上がり屋上につくと薫は確かにそこにいて、待っていたかのように茂に手を振った。茂は嬉しかった。
「ランチを一緒にと思って」
「食事はいいよ。でも一緒にいろいろ話そう」
とはいえ、何を話そうか？　しかし話題に尽きることはなかった。薫は学校のことに詳しく、いろいろな情報を茂に教えてくれた。茂は自分の近況を語った。それは薫には楽しいものらしく、熱心に聞き入っていた。しかし楽しい時間は短いもので、実際に昼休憩は短いものだった。
「もういくよ。最後に一つ質問があるんだけど。この学校に最近幽霊がでるらしいんだって。みんな噂してるみたい。何か知ってる？」

「幽霊ならこの学校には格好の場所だよね」
どういうことだろう。茂は首をかしげた。
「この学校はね、そういうものを引き寄せてしまうところなの。茂君は気をつけてね。敏感な人だから」
茂にはますますわからない。
「俺は霊感があるってこと？」
「あるよ。強い霊感が」
そういうと薫は茂の右手を両手で握った。茂は戸惑いを覚えた。
「だからね、この学校には君が必要なの」
「よくわからないんですけど」
「すぐにわかるよ。君は普通とは違う」
薫の顔はどこか同情しているようでもあり、何かを憂いているようでもあった。
「君はこれからさまざまな試練を受けると思う。その試練の一つが、そろそろ始まるんじゃないかな」
「試練……それは幽霊と関係があるの？」
薫はにっこりとして、それ以上何もいわなかった。
「またきてね」

?

次の日は大雨だった。これでは屋上にはいけないだろう。午前中に降り止んだとしても床が濡れて座れない。薫もこないだろう。

憂鬱にしていると、奈央が珍しく話しかけてきた。

「幽霊見た？」

「見ないよ」

「あんたって幽霊なんじゃないの？　あたしにしか見えない」

無視するか、反論するか。

「お前が幽霊なんじゃないの？」

「こっちはほかの人には見えるもの。あんた、誰とも喋らないじゃん。見えてないんじゃないの？　実は自殺して校内をうろつく自縛霊かもよ」

奈央のくだらない言葉をいちいち否定することはたやすいが、そんなことをしたら向こうの思う壺なのでそれを避けた。別の方法で攻めることにした。

「奈央って俺のことが好きなの？」

「馬鹿じゃないの」

奈央の返事は驚くほど冷めていた。

鬱陶しいので教室を離れて廊下を意味もなくうろつく。すれ違う可愛い同級生の少女たちはこちらを気にもしない。全く、寂しいことだ。

ちょうど催してきたのでトイレに入った。ズボンのジッパーを下げ小さく縮まった陰茎を取り出し、小水を便器に流す。先ほどの奈央の態度が思い出される。くだらない会話だったが、妙に腹が立つ。あのアマ、と心の中で憎憎しく罵る。

手を洗ってトイレを出る。教室に戻ろうとすると茂は妙な違和に気づいた。

静かだ。廊下は、無音の静寂に包まれていた。何の気配もしない。

まるで茂一人だけがこの世界にいるような感覚になるほどに。
移動教室？　いや、全校集会かなにかだ。どの教室にも生徒の声が聞こえない。周囲を探っても、誰の姿もない。おかしい。やはり全校集会だ。みんな体育館に集まって体育座りだ。
全校集会なんて話は聞いてなかったぞ。嫌な感じだ。誰も彼もが自分の敵みたいだ。茂は一人、暗い考えに浸っていた。
なんだか本当に妙だなと思ってきた。おかしい。何がおかしいのか。再び周囲を見渡す。やはりおかしい。何がおかしい？
静かすぎるということだ。あまりにも。あまりにも静か過ぎる。なんというか……空間が、普通ではない気がする。落ち着いた静かさとは違う、何か異質な空気が辺りを漂ってっている気がしてならない。
どうなってる？
廊下の奥に女生徒が見えた。セーラー服だから当然女生徒だ。女だとわかる程度の髪の長さ。肩まで伸びているというわけではない。
女生徒が一人いたからといって不安な気分は消えなかった。女の顔は遠すぎてわからない。しかしこちらに近づいてくるのはわかった。
あっと茂は口をあけた。女生徒の顔はなかった。のっぺらぼうのように。女は茂に向かって歩き出した。
近づいてくる。逃げるべきだろうか。悪寒が走る。どうするか。女はだんだんと近づいてくる。
女の何もない顔から口が出現した。口はにやりと曲がっていた。
とりあえず茂は女に背を向けて逃げ出した。教室には戻らずに一階へ。一階の前に女がいて、今度は口だけでなく鼻もあった。次は目玉かと茂は上に駆け上がるときに思った。二階に戻る。女の笑い声が聞こえる。茂にはそれが嘲笑に聞こえた。無様に逃げ惑う自分に対するあざけりの笑い。
嫌な汗が出てくる。頭が冷静でいられない。どうするどうするどうする？　くそっ、何で俺がこんな目に。

屋上だ。茂は思った。屋上にいくべきだ。こんな薄暗い場所では発狂してしまう。屋上に向かう。恐怖を断ち切るように茂は走った。背後から何かが駆ける音が聞こえる。一瞬振り向く。女が両手を前に突き出しながら向かってきていた。気持ちの悪い光景だった。女には両目が出現していた。その目には混沌と狂気が混ざり合い、さらに邪悪な、言葉にできない悪意に満ちていた。

捕まったら命はないと茂は思い込んだ。あれは化け物だ。全速力で駆け、三階へ。猛スピードで階段を駆け上がる音が背後から聞こえてくる。

屋上の扉を開け、十段ほどの階段を上がる。屋上は普通だった。雨が降っていて空はどんよりしている。車の走る音が聞こえ、空には雨の中でも鳥が飛んでいる。雨が降っているだけの、平凡で日常的な風景だ。服が濡れるが茂は気がつかなかった。

振りかえる。階段下の扉の向こうで、扉の前で茂を睨みつける女生徒の姿があった。

茂は思わず悲鳴を上げてしまいそうになった。扉の前にへばりつくものは扉を開ける気配を見せない。

「正解だよ」

声がした。まさかと茂は思った。それは薫の声だ。声のしたほうを見る。

薫がいた。

「薫さん」ほっとするが、危機はまだ去っていない。

「あいつは大丈夫。ここにはこれないから」

「薫さんだけ何でここに？　ほかの生徒たちがどこにもいないのはどういうわけなの」茂は質問を連発する。

薫は困った顔をした。

「とにかく今はあいつをなんとかしないと」

音がする。あいつがきたのだ。

薫に、化け物がぶつかっていく。

「薫さん！」

?

学校を休むということに何か意味があるだろうかとその日の終わりにベッドの上で考える。登校拒否をしたら両親が心配するだろう。それはできない。だがどうすればいいだろう。こんな超現実的な恐怖に自分が遭遇するとは考えたこともなかった。

いや、考えたこともなかったというのは嘘だ。退屈なとき、ときには幽霊に出くわすのも悪くないという考えに浸ったときがある。本当に怖いのは孤独だから。そう思ってた。しかし霊に目をつけられるというのは似たような恐怖らしい。

この奇怪で、人に救いを求めるのも難しそうな状況を打破する術はあるだろうか。何かあるはずだ。

ふと思い当たった。あの非現実的な状況で屋上に向かったとき、薫に会った。そして、薫は霊と……霊を追い払った？　わからないが、自分が今こうして無事にいるのは薫のおかげだだろうと思った。

薫はいったい何者なんだろう。なぜあんな場所にいたんだろう。大雨だったのに。

明日、薫に直接聞いてみよう。もしかしたら学園に詳しい薫は全てを知っているかもしれない。

「負けないぞ」茂は呟き、心の中の恐怖を追い出そうとした。今日はもう寝よう。電気を消して目を閉じる。暗闇の中で女生徒の化け物を思い出す。再び電気をつける。今日はこのままで寝よう。

次の日のホームルーム前に蓮華が話しかけてきた。

「知ってるか？　何でも石原百合子が行方不明らしいぜ」

「誰それ」石原百合子なる人物のことを知らない茂はそう尋ねた。

「同じクラスのだよ。生徒会で会計をしてた。昨日学校に残って生徒会の仕事をしてたらしいけど、忽然といなくなったらしい。鞄があるのに、百合子の姿がどこにも見えないらしい」

「マジかよ」百合子という生徒のことは知らないが、顔を覚えてないということはさほど派手な容姿ではないのだろう。生徒が行方不明になるというのは大変な事件だ。行方不明というだけで大事なのに、これが痛ましい事件となったら……。
「当てはないのかよ？」
「わからない。友達も生徒会も親も教員もさっぱりだってさ」
「ずいぶん詳しいな」
「みんなの噂を総合しただけ」
なるほど。ほかの生徒たちがいつも以上に騒々しいのはそういうことだったのか。
「百合子はさ、地味だけどいいやつなんだ。あいつに何かあったら俺、ちょっと悲しいかな……」
蓮華はしんみりした様子を見せ、茂はどう返事をしていいのかわからなかった。
「きっと大丈夫だよ。警察も必死に探してるだろうしね」
「だといいけどな。警察なんてあんまり当てにならないから」
蓮華は自分の席に戻っていく。
茂は神妙な気分だった。今日も外は雨で、暗い気持ちにますます拍車がかかった。
石原小百合という生徒は行方不明になった。それは、もしかすると昨日の現象と何か関係があるのではないか。関連付けをする理由はタイミングのよさだけだが、茂には関連があるという自信があった。それだけに余計に不安になる。恐ろしい考えばかりが頭をよぎる。
窓の外は雨。早く止んでほしい。今日は屋上にいきたい。薫さんに会いたい。会わないと。
茂の願いが叶ったのか、雨は一時限目の途中で降り止み、日本晴れとなった。天気が変わっただけで鬱屈な気持ちが少し晴れた気がした。

昼休みになるとすぐに屋上へ。そういえば奈央と一言を交わしていないなと思ったが、どうでもよかった。何であんなクソ女のことが気になるのか、自分でも不思議だった。顔がいいというのは、それだけで男を否が応でも惹きつけるものらしい。腹立たしいことだ。

屋上にいくと薫がいた。薫さん！　茂が駆けると、薫の隣に誰かいることに気づいた。男だった。茂は動転して声を掛けられなかった。。

「あ、茂君」薫が気づいた。

男が茂を見る。それはこの前すれ違いになった不良生徒だった。

「おお、お前か」男はどことなく親しみを込めた様子で茂に声をかけた。

「ああ」茂はどういっていいかわからずにそう答えた。頭の中はなぜこいつがいるのかという思いでいっぱいだった。

「この前話した章吾君。初対面だっけ？　彼も君と似てる人だから、仲良くしてね。友達少ない同志、いいでしょ」

「お前にいわれたくねえな」章吾といわれた金髪の男子生徒は薫をにらみつけた。そして茂を見た。「お前茂っていうのか。俺は章吾。尼崎（あまがさき）章吾な。同じ二年なんだろ。俺はD組だから。よろしくな」

よろしくっていったいどういうことだろうか。これからこいつと友達になるってことなんだろうか。茂にはさっぱりだった。しかし挨拶をされた以上、こちらもするべきだ。

「Bクラスにいる佐藤茂。転校してきて日が浅いけどよろしく」

「転校生か。お前たぶん運が悪いんだ。きっとそうだ」

一体どういうことだろうか。茂は首を捻った。

「まあいいや。よろしくな」

「転校してきたばかりで親しい人間はそこの薫さんくらいだから、仲良くしてくれると嬉しいよ」茂は自分でも驚くほど饒舌にしゃべっていることに驚いた。どうやら自分は思っていたより社交性が高いのかもしれない。

「じゃあ二人は友達ってことで！」

薫が二人の背中を叩いた。かなり痛かった。
「あたしちょっと向こうにいるね」
薫は向こうにいってしまった。いきなり不良と二人きりにされて茂はどうしていいかわからない。
章吾はじろりと茂をにらみ付けた。
「お前……見たんだろ？」
「見たって、何を？」
「幽霊をだよ」
なぜこいつがそんなことを知っているんだろう。
「全部薫から聞いた」
茂は薫のほうを見ようとしたが、薫はいつの間にかいなくなっていた。
「あれ？」
「あいつはしばらく出てこないだろ」
「どういうこと……薫さんて何者なの？」
「自縛霊だよ。この屋上限定の」

？

しばらく頭の中が混沌としていた。そして、段々と今までのことに合点がいき、なるほどなと納得した。薫が霊なら、あのときの不思議な現象も受け入れることができるかもしれない。

しかしそれにしても……薫が幽霊なんて。俄かには信じられないが、おそらくそれは事実。現に今そこにいたはずの薫は影も形もない。

「屋上の幽霊ってのは薫さんのことだったんだ」

「そうだ。それを見えるほど霊感がある人間は少ない。ましてや日常会話をできるなんてのは俺や瑠香くらいだと思った。だけど、お前も相当霊感が強いみたいだな」

「薫さんはどうして自縛霊なんかに？」

章吾は首を振った。「俺も知らねえ。あんまり聞くと悪いと思ってな。でもあいつはいい霊だ。お前が会った霊みたいに邪悪じゃない。お前だって薫に守られたんだろ？」

そうだ。あのとき屋上にいき、彼女が雨の中にいた。どういうふうにかはわからないが、薫が守ってくれたと考えていいのだろう。

「俺が遭遇したあの霊。いったいどういう存在かわからない。悪霊？」

「まあ、いってしまえば悪霊だな。それも極めて性質が悪い霊だ。やつは最近出没し始めた。俺は気づいた。薫以外に変なやつがいるってな。一回襲われた。なんとか逃げたけどな。かなり危険だと思う。自縛霊じゃないのに、この学校から離れない。あいつがいる限り今回みたいな行方不明事件はおき続けるだろうな」

「石原百合子のことかな。あれもその霊の仕業だと？」

「だと思う。薫もそうだと言ってるし」

いつの間にか隣に薫がいて、茂は妙に驚いた。彼女の肌はどう見ても生気のある人間のそれだ。瑞々しい若い体。豊満な胸。たまら

ない。なぜ彼女は霊なのだろう？
「話は大体済んだ？」
「ああ。後はお前からいってくれ。俺はちょっと用があるから教室に戻る。またな」
章吾は屋上から出て行った。
残された茂は沈思黙考し、この特異な状況を整理した。薫は霊で、章吾と自分は霊感体質で、邪悪な霊が校内にいる。
邪悪な霊は白石小百合を行方不明にした。だとしたら、これから先も行方不明者が出るということか。恐ろしい。
「薫さんは霊なの？」茂は単刀直入に聞いた。
「そうだよ」薫は微笑みを浮かべながらそう答えたが、どこか憂いがあった。
「薫さんが霊なんて、全然気づかなかった。だってどう見ても人間だもん」
「あたしは霊になってもう十年くらい経つの。たぶん、やりかけたことがあるからここから出られないんだと思う」
「やりかけたことって？」
薫は悲しそうな顔をする。「わからない。だけどたぶん、屋上で飛び降り自殺したんだと思う」
飛び降り自殺。こんなに明るい少女が、自殺なんてするんだろうか。だけど人間はわからないものだから、そういうこともあるのかもしれない。
「薫さんが飛び降りなんてするとは思えないけどな」
「死んだときの記憶はないの。気づいたらここにいて、この屋上から出ることはできない。だから、たぶん死因は何であれ、屋上に関連しているということは間違いないと思うのね」
茂はその推理には同意だった。薫は屋上に縛られて動けないのだ。死んだ場所が屋上なのは間違いないだろう。
茂は話題を変えることにした。今、話さなくてはならない問題だ。
「あの悪霊のことだけど、いったい何が目的なの？」

薫はため息をついた。何かもかもが全く人間同様だ。彼女は本当に霊なのか？

「霊のあたしだって同じ霊の相手のことはさっぱりだよ。だけどね、相手の怨念がすごい強いってことはわかる。屋上にいるから外の世界の霊のことはよくわからないけど、あの霊は危険だよ。行方不明にされた彼女も、あの霊によってすでに……」

「すでに？」その先は聞きたくなかった。

「やめとくよ。少し忠告ね。見えない世界に注意して。茂君ならたぶん見えてしまうから。霊はそこに連れ込もうとしてると思う。あの霊にあったらすぐに逃げて。ここにくるのもいいけど、必ず守ってあげれる保証はないからね。それから仲間を集めて。君と章吾君だけじゃ心もとないから。もっと見える人が必要になると思う。予想だけど、君ならたぶん同じ種類の仲間が集まると思う。あいつは、たぶん見える君や章吾君を狙うと思う。気をつけてね」

頭がくらくらする。薫の忠告は、恐ろしかった。これから先、再び昨日のようなことになるかもしれない。またあんな目にあったら、今度こそ駄目かもしれない。

？

次の日の朝、体育館で緊急集会が開かれた。校長が生徒全員の前に立ち、白石小百合が行方不明で、依然として捜索中だと発表した。何者かが誘拐したという可能性も高く、帰宅のさいは必ず複数で帰るようにと申し出があり、可能なら親御さんに送り迎えしてもらうほうがいいとも言った。

しかし相手が霊なら、登下校の際の注意は無意味だ。事件は校内で起きてるのだから。

授業中、茂は今後の対策を考えたが、何も思いつかなかった。薫の忠告を思い出している。仲間を集え、か。章吾のほかにも霊が見える生徒がこの学園にいるのだろうか。いるとしたらその生徒をどうやって見つけ出せばいいのやら。

とりあえず章吾と話す必要があると茂は思った。章吾はDクラスだ。休憩になったら章吾の下に向かおう。

休憩になるとDクラスへ向かった。どの生徒も白石小百合が行方不明になったことの話をしている。行方不明という衝撃的な事件がおきればそうなるだろう。だがそれはまだまだ続くかもしれない。

章吾はいた。席で寝ている。別の教室のクラスに入ったことがないからどこか緊張する。意を決して章吾の下に向かう。

「転校生じゃねえか！」

誰かが茂の肩を叩いた。

見知らぬ生徒が数人、ものめずらしいものでも見るかのように茂を取り囲んだ。

「どこから引っ越してきたんだよ」見知らぬ生徒がいやに馴れ馴れしく尋ねてくる。

「神奈川だよ」茂は素直に答えた。

「都会だ！　こっちは田舎だから退屈じゃねえか？」

「そんなことないよ」

「そう？　俺は古谷正樹。よろしく」
「よろしく」
からかわれたのかと思ったが、友好的なようだった。飄々とした雰囲気がある。どうも面白そうなタイプのやつそうだ。
「転校生、クールだな」数人のうちに一人が笑った。
「さすが転校生だけあるぜ」
どうもこの場にいづらい。ここは退散したほうがよさそうだ。章吾とはまた別のときにコンタクトを取ろう。茂は逃げるようにその場を去った。
待って。
声がした。普通の声じゃない。脳の中に直接響いてくるような声。
すでに廊下に出ていた茂だったが、立ち止まって今いたクラスの様子を眺めた。先ほど話した連中はではない。声は女の子の声だった。
気のせいかなと歩き出すと背後から足音が聞こえた。振り返ると、長い黒髪の女生徒が立っていた。
「あなた、章吾君に用があったんでしょ？」
「何でわかったの？」
「あたしはね、そういうことがわかる子なの。他人の心を読めるの。ほんの少しだけね」
廊下には他の生徒たちもいて、賑やかだった。茂は真剣な顔で話す彼女にどう対応すればいいのかわからない。
「俺の心を読んだ？　テレパシーでも使えるの？」
「冗談でいったんだろうけど、実はそうなの。あたしはテレパシーが使える。それに霊感もある。薫のこともちろん知ってるし、省吾とはそっちの方面の仲間でもあるの」
「へえ」
「君、幽霊に襲われたんでしょ？」
「詳しいね」
「化け物だよ、あの連中は。この世界はね、闇の部分が多いから。

幽霊だけじゃない。化け物の宝庫なんだから。特にこの金須野っていう町はそうなの」
「そうなんだ」
「あたしは味方だよ、佐藤茂君。省吾と同じように頼っていいよ。あたしは芳賀瑠香。よろしくね」
握手を求めてきたので茂はそれに応じた。
背後に男子生徒が現れた。先ほど話しかけてきた男子連中の一人だ。名前を名乗ったな。古谷正樹といったっけ。
「芳賀、何してるんだよ。転校生をいじめんなよ」
「あたしは転校生と親睦を深めてるの。部外者はあっちへいってよ」
「はいはい」
古谷は教室に戻っていった。
「あいつには気をつけて」
「え？」
「あいつの心の中を見ることができないの。もしかしたら、普通の人間じゃないかもしれない」
「そうなの」なんだかついていけない。
「じゃあまた。昼休みにでも会おうよ、屋上でね」
彼女は教室に戻っていく。茂は今の流れについていけず、教室に戻って頭を落ち着けることにした。

？

昼休憩に屋上に赴くと先ほどの女生徒芳賀瑠香と章吾がいた。薫もいる。
「こんちは」芳賀が気さくに挨拶をしてきた。
「どうも」
「今ちょうど話しあってたんだよ。茂君」薫が言う。
「何をですか？」
「俺たちで悪霊退治をする方法だよ」と章吾。
霊か。悪霊なんて存在しないと思っていた。今までは。
だけどこの人達はそれが存在するということを理解していて、そしてそれを退治しようとしている。ゴーストハンターか。
「面白そうだ」
「よく言った」
章吾が立ち上がって茂の肩を叩いた。強い力で、貧弱な茂は少しよろけた。
「お前、肉食ったほうがいいぞ。霊より軽いぞ」
霊に体重なんてあるのだろうかと茂は思う。
「それで、どうやって霊を退治するのさ？」
「あたしたちは霊に対して干渉できる力を持っているだろ」瑠香が言う。
「そうなの？」
「そうだよ。それを使って、あいつをやっつけるんだ」
「俺たちは今まで霊を自力で退治してきたんだからな」
「俺はそんな力ないよ」
「知らないだけだ。教えてやるよ。低級霊を退治するやり方をさ」
霊の戦い方？　茂は首をかしげた。

放課後。秋の空の下、茂たちは金須野ではもっと人通りの多い繁

華街を歩いていた。それからそこを超え、人通りの少ない寂れた場所についた。
ここで何をするというのだろうと茂は半ば緊張して二人の挙動を見守った。場所は人気がないとはいえ、民家が密集しているような場所だ。ここで本当に幽霊退治のようなことをするのだろうか。それは一体どうやって――。
「いるか？」
「わからない。あ、ちょっと反応があるね。薄いけど、その角にいる」
瑠香と章吾が道路の右へ曲がったので茂がついていくと、その先にうっすらとした存在がいた。
たまに見るものの一つ。ぼんやりとした影。
「すっごい低級だ。実体を伴わない」章吾が言う。
「影の状態だもの。これからどう転ぶかわからない。とにかく茂君、これが見えるでしょ？」
瑠香がぼんやりした影を指さすので茂はうなずいた。
「たまに見てるんでしょ？　不思議だ。よく今まで実害がなく生きていけたね。運がよかったのかな」
「いやあ、鈍感力って大事だよな。意識しないと向こうも簡単には手出ししないだろうし。憑かれるっていう経験がないんだろうな。そういう人間はよくいるし」
「で、あれをどうするっていうの？」
「消すんだ。念を込めて。やってみろよ」
茂は章吾に押されて低級霊と言われた影のようなものに近付いた。ぼんやりとした影は一般人には見えないもので、その場に止まっているようで実はゆっくりゆっくりと移動している。茂にはわかる。向こうはこちらに気づいている。これが本当に意志を持った存在なのか茂にはわからないが、直感で、これが自分に敵意を持っていると感じた。
「どうすればいいの！」茂は後退する。

「念じるんだ！　そいつに強い気を送れ。相手を消すような気持ちだ」
　章吾はそう言うが、茂にはよくわからない。
「まずそいつの中に腕をつっこんで。そして、相手から伝わる負の感覚に打ち勝とうとするの」
　茂はよくわからないまま、影の中に腕を入れてみた。
　軽い不快感。これが負の感覚という奴だろうか。嫌な感じだ。なんだか気分が滅入ってくる。だが軽いものだ。例えるなら授業中に教師に怒鳴られて落ち込んだときのような。こんなものなら、耐えることはできる。いや、耐えてどうするというのだろう。そうだ。この不快感を取り除こうとすればいいんだ。やり方はよくわからないが、気合いだ。茂は目を閉じて、なるべくいいことを考えて、そして霊なんて消えちまえという思いを強めてみた。
「影が揺らいでいる。いいぞ、その調子だ」
　背後から章吾の声。効いているのだろうか。もっと強く念じればいいのだろうか。茂は陽の感覚を強めようと努力し、さらに激しく相手を消し去ろういう気持ちを強く込めた。
　何かがぶつりと切れるような音がしたと思うと、一瞬、蒸発するような音と共に小さな悲鳴が聞こえた。虫の悲鳴のような小さなものだったが、茂は目を開けた。陽炎はすでになくなっていた。
「やっつけたの？」
「そうだ。お前が倒した。やっぱり素質あるよ、こいつ。低級とはいえ、やっつけた」
「あんなの見える人なら誰でもできるって。あたし達は数少ない見える人――いってしまえばエリートなんだから」
「エリート？　変人の間違いじゃねえの？」
「あんたもね」
「俺たちが、だ。こんなことしてる俺たちは端から見ればただの変人だ」
「見た目の割に客観的なことが言えるんだ。でもいいじゃん。周り

の連中なんて、自分が魑魅の類に狙われてることも、憑かれてることも知らないんだから」
「だからよぉ、俺たちが守ってやればいいんじゃね？」
ひんやりとした秋の風が流れた。
茂は自分の手を見た。普通だ。特に異常はなさそうだ。
幽霊を退治したようだが、ずいぶんとあっさりとしたものだ。実感がない。だけど、やったのだ。誇っていいのだろうか。普通とは違うことをしたのだ。見えるだけじゃない。茂は心の中に強い高揚感が募るのを感じた。見えるだけじゃない。これまでとは違うことをしたのだ。
「守るか……。いいね。エリートは凡人を守らないと」
「そうだろ」
「章吾って不良のくせに面白いね」
「馬鹿、俺は不良じゃねえよ。見た目で判断するなよな」
瑠香が笑う中、茂は自分自身に感動していた。

?

「というわけで、後は訓練だ。心を強くしろ。敵のマイナスの気に当てられて弱気になるな。逆にこっちの強い気をぶちこんでやればいい。影の弱い強いは見た目で判断しろ。実体化してる影は手強いし、お前ならたぶん逆に取り憑かれる。後が大変だから徐々にコツを掴んでからにしろよ。やばそうだと感じたらすぐ逃げろ。低級なら動きも遅いから取り憑かれない限り逃げれるはずだ。じゃあな。気をつけろよ。なんかあったら電話しろ」

章吾と瑠香から携帯電話の番号を教わり、三人とはそこで別れた。

「あいつ早速霊退治するぜ」章吾は茂に聞こえないように瑠香に言ったようだが茂には聞こえていた。

茂はその通り、早速別の低級霊を探すことにした。ここの場所はいいのかもしれないが、あまり知らない場所だ。あんな存在が勝手知ったるこの町に無数も存在するなんて。茂は信じられない思いだった。意識しないと、見方を変えないと、見られないものというのがあるのかもしれない。

茂は場所を変えることにした。なるべく家に近い方がいいな。

電車で家の近くまで向かい、近所の公園周辺をうろつく。不審者だと思われなければいいが。

白い人影のような存在が揺らめいている。茂はラッキーだと思った。こうも早く探していたものに会えるとは。早速茂は影に近付いた。人影は本当に人の形をしていて、シルエットのようだ。茂は近付くにつれ恐ろしくなった。実体化するほど霊は強力だという。これはまだ影のようだが、先ほど影よりも危険な感じがする。

茂は躊躇する。逡巡した後、とりあえず先送りにすることにした。これだけあっさり見つかったのなら他にも影はいるはずだ。それらを探してみよう。

結局、二匹の収穫があった。どちらもおぼろげな影で、簡単に消し去ることができた。三匹目を狙おうと歩いていたら気分が悪くなったのですぐに帰宅し、風呂に入り食事をとると早々に寝た。起きると気分はすっかりよくなっていた。

教室につくとクラスメイトが相変わらず賑わっている。そんな喧噪もあまり気にならない。茂の気分はよかった。

席につく。隣の奈央は携帯電話をいじっている。

「おはよう」

茂の挨拶は届いたのだろうか。返事はなかった。

ため息をつく。まあいい。いつものことだ。

ちらりとこちらを見た気がした。気のせいだろうか。どちらにせよ会話にはならないだろう。茂は奈央と話がしたかった。彼女のことが好きになっていた。愛くるしい瞳を見ながら会話をするだけで心が安らぎ、幸せな気分になると共に彼女の唇に唇を重ねたいという気持ちが湧いてくる。

もしかしたらそういった下心がわかったから、警戒されたのかもしれない。だとしたらすごく恥ずかしい。

茂は顔に自信がない。いかにも普通という顔なので、自分が女にもてるとは思っていないが、しかし、それにしても隣の女子は自分を嫌いすぎではと思う。

まあいいや。所詮女は顔がいい男が好きなんだろ。幽霊だけど、薫のほうがずっと自分を親しんでくれる。生身でないのが残念だ。本当に残念だ。あんな素晴らしい顔と体をしているのに。

本当に幽霊なんだろうか？　なんとなく、まだ幽霊であるということを認めたくないという気持ちが茂の中にはあった。

チャイムとほぼ同時に教師がきた。ホームルームを終わらせると入れ違いに一時限目の授業である世界史の教師がきた。

昼までは孤独だ。

？

昼休憩に屋上へいくと章吾と瑠香がいた。薫もいたが、彼女は手すりの上に立っていて、茂はもう少しで声を上げそうになった。とっさに彼女が霊だということを思い出した。

「くると思った」薫が言った。

「ここしか居場所がないんでね」

そんなところにいたら下を通る人間にパンツが見えるのではないかと思ったが、一般人には見えないのだから問題なのだろう。茂は思う。服も霊体の一部なのだろうか。霊体というのは体以外にも含まれるのだろうか。くだらない疑問かもしれない。しかし不思議だ。

弁当を広げ、食事を始める。

「昨日あれから他の霊もやっつけたのか？」章吾の質問だ。

「うん。二匹退治したら気分悪くなったからやめたけど」

「あいつらの負の力に当てられたんだよ」

瑠香が言う。彼女は食堂で買ったパンとサラダだけだ。少し寂しいが、何かわけてやるべきだろうか。

ところでこの瑠香という女生徒は前も思ったが、それなりに可愛い。ちょっとお姉さん的な雰囲気だが、魅力的な顔立ちをしている。ちょっとヤンキー風だが。背は高く、薫よりもありそうだ。つまり茂よりも高いということ。

「早いところ茂をそれなりの霊能力者にしないといけないよな」

「そうだね。今日も訓練だね」

「俺は構わないよ」

「勿論だ。お前が早いところ育たないと学校の生徒はまた減るかもしれないからな」

章吾の目は本気だった。おそらく、嘘ではない。石原百合子は行方不明になった。茂が遭遇した霊が原因なら……あの化け物がまだ学校をうろついているのなら、次の犠牲者が出てもおかしくない。

「行方不明になった女子は生きてるのかな」茂が疑問をぼそりというと、場の空気に冷たいものが走った。
「それは答えられないな」
やがて、章吾が言った。
「希望を持つのは悪くないよ」瑠香は言うが、その顔は決して希望を持っている者の顔ではない。
彼らは霊のことを自分よりよく知っていると茂は思う。行方不明になった白石百合子がどうなっているのか、薄々察しているのかもしれない。
「どうすればあの霊を退治できる？」
「お前次第」章吾が答えた。

霊退治の二日目。場所は昨日と同じ、陰鬱な住宅地。枯れ木に鴉が止まっているような場所だ。見るからに霊がいそうではある。
歩き回ることもなくぼんやりとした白い影が現れた。発光しているその存在はワンピースを着ている長い髪の女に見える。
「あれは恨みが強そうだ」茂が言った。
「恨み？　違うな。恨みなんて霊には関係ない。あいつらは人に取り憑き、その人間の性質を真似ていく。恨みなんて関係ない」
「でも、生前に強い恨みを持った人が死んで……」
「そんな話は眉唾だ。今までの霊に対する考えは捨てろ。俺たちのいう霊っていうのは、唐突に発生し、人に取り憑いて段々と力を増していき、しまいには面倒な存在になるっていう厄介なもののことだ。姿形も様々。全て取り憑いた者に影響するんだ」
「それじゃ、俺たちの目の前にいるあれは……？」
「取り憑いていた人間によって構築された姿だ。別にあいつが生前ワンピースを着ていた女の霊ってわけじゃない」
この男、霊媒師達を完全否定しやがった。茂は驚いた。章吾という男はよく知っている。見た目はただの不良なのに。喋り方も全然不良臭くない。もっと阿呆っぽくていいのに。悔しい。こいつ、自

分より頭がいいのではないだろうか。
　ところで目の前の存在はゆっくりとこちらに移動してきているので、茂は近付いてくるにつれて緊張していた。見たところ昨日相手したような霊とは違う。もっとずっと手強そうだ。顔の輪郭が見える。はっきりとはしないが、目鼻口があるのがわかる。
　こちらに近付いてくるのはどうしてだろう。俺に取り憑こうというのだろうか。そうであろう。彼らはそれしかない。取り憑かれるとどうなるのだろう。やはり段々とやつれていくのだろうか。寄生虫のような奴らだ。
　意を決し、茂は近付いてきた霊に右手を突っ込んだ。見た目は昨日の霊よりはっきりしているが手に何かが触れたという感覚はなかった。
　嫌な感覚が右手を通りして全身に伝わってくる。負のオーラというやつなのだろう。これを長時間続けていたら、吐いて倒れてしまいそうだ。
　相手を霧散させるような強力な気を送り込むようなイメージ。昨日のでだいぶ感覚が掴んできている。だがそれを送り込んでいるときに、茂の体は限界を感じた。茂は右手を引っ込め、後退した。
「判断はいいね。そういうの大事よ」瑠香が言った。
「だけどこんなのに手こずるようじゃまだまだだ。ちょっとどいてろ」
　章吾が茂を押しのけ、霊に対して手を出した。そして章吾が「消えろ」と言うと、霊は奇妙な悲鳴を一瞬だけ上げ、霧散した。
「消えた」茂は呆然と呟いた。
　章吾が振り返る。
「スマートだろ？」
「章吾がやったのを説明するとね、章吾は言葉を使うとより自分の力が高められるの。暗示的なものかな。あたしはわからないけど。変だよね」
「お前のテレパシーのほうがずっと普通じゃないけどな。まあ、今

のは一例だ。俺はお前よりも霊をずっと退治してるから、あの程度ではちょっと気を送り込めば余裕なんだ。お前はまだもう少し弱い奴で練習かな」
なんだろう。霊ってこういう訓練に使われるような存在なのかな。茂は少し霊に同情する。
しかし悔しい。というよりもずるい。茂は不満を感じた。
「なんだよ、二人ともずっと前から霊退治とかしてたんだろ？　俺が今のに敵わなくても仕方ないじゃん。経験少ないんだから」
「そうだな。気にすんな。別の弱いの探そう」
釈然としない。こんなにも差があるなんて。何故彼らは霊を退治してきた過去なんてもっているのだろうか。普通は能力があってもそんな機会は訪れないはずなのに。今度聞いてみようか。
二匹目もすぐに現れた。薄い亡霊めいた存在だが、これは霊であって、一般で言われてるような霊という存在ではない。というよりも、誤解された解釈をなされた者だ。
だが実害はあるので、退治する必要は、あるのだ。
霊を破滅させる力をもつこの右手……普段は普通の手だが、ひとたび力を込めれば、自らをも滅ぼしかねない諸刃の刃と化す……。そんな想像をしつつ、茂は霊に近付き、その右手を霊の内部に直接入れた。
激しい不快感に茂は思わず手を引っ込める。
影のような霊は、茂に恐怖を与えた。目を見せたのだ。二つの憎々しげな目を見て、茂は思わず後ずさった。
章吾の背中が茂の視界をふさぎ、霊を見えなくした。
「まだ危ない相手だろ」
だが茂は苛立っていた。霊にも、章吾にも、自分にも。怒りにより茂は恐怖を払拭した。
茂は章吾を退かせた。
「おい――」
「下がっててくれ。俺の獲物だぞ」

茂は再び霊に手を突っ込んだ。強烈な不快感に吐き気がこみ上げてくる。
嫌な気分になる。だがこれは精神的なものだ。肉体的なものではない。そうも思うが、耐え難いものだった。
橘奈央の顔が出てくる。まるで死ねばいいのにという顔で、彼女は茂を見る。それが茂にはたまらなく悲しくさせる。
だが、そんなことはいつものことだ。これからだ。これから彼女と親しくなってみせる。可愛いと思えた女だ。いずれ恍惚の表情を浮かべさせてみせる。俺色に染めてやるぜ。くそっと茂は欲情を抑える。むらむらしてきた。
そんなことを思っているのが結果的にマイナスをプラスに変えたのかもしれない。霊は破裂し、霧散した。
「おお」章吾が背後で拍手している。
「駄目かと思ったよ」瑠香も拍手する。
茂は振り返り、親指を立てて見せたが、体がふらつき、態勢が崩れた。章吾が茂を支える。
「ちょっと負荷がかかったみたいだな……まだお前には早い相手だったよ」
「でも俺、レベルアップしたろ？」
「死んだら何にもならないからね」瑠香が優しく茂の髪を撫でた。少し強気な印象のある彼女だったが、茂はその印象を変えた。実に女性らしい穏やかで聖母のように優しげな表情だ。一日や二日でその人のことなんてわかるわけがない。彼女も色々な面を持っているのだろう。
「今日はこれまでにしよう」章吾が言った。

?

朝起きると調子は戻っていた。なんという気楽な体だろうと茂は思う。いや、若いんだ。きっと見た目以上に自分はタフなんだ。

起きて支度し食事を取って外に出る。自転車で通い慣れた始めた五百メートル先の高校に向かう。

途中で老人が立っていた。道の往来で、老人は穏やかな笑みで、しかしまっすぐ茂を見ていた。

よくわからずに茂はブレーキをかけて老人の前で立ち止まった。

「失礼」老人は声を発した。「君に用があって止まってもらったんだ」

「はぁ」

茂は薄気味悪さを覚えた。この老人、見たところどこにでもいるような爺さんだが、一体全体自分に何の用だろう。いや、何故自分のことを知っているのだろう。

「不気味に思わないでもらいたい。私はこの金須野町に巣くう魑魅魍魎たちを滅ぼす仕事をしている者だ。そしてこれが私の名刺だ」

差し出された名刺を茂は受け取る。

「ありがとう。もし君が金須野町の平和を強く願うなら、ここに連絡して欲しい。では、邪魔をしたね。私のせいで学校に遅れないことを祈ってる」

老人は茂とは反対方向へ歩いて行く。

茂は名刺を財布にしまい、全速力で学校に向かった。老人の言うとおり、遅刻はまずい。

「で、これがその名刺ってわけか」章吾は胡散臭げに茂が老人から受け取った名刺を見る。

「達川国雄ねえ。理由はわからないけど、きっと大した能力者だな」

「なんでさ？」茂は弁当を食べつつ、章吾と会話をする。

「面識がないんだったら茂が能力者かどうか判断できたってことだ。つまり茂が発する独特のオーラを感じ取ることができるってわけだ。熟練の魔祓いだな」
「へぇ。そういうもんなんだね」
「その達川って人の言うことに嘘はないと思うよ」瑠香が言う。「金須野って町は本当変な町だよ。化け物たちの巣窟だもんね。それらを倒している組織があるって話も聞いたことあるし」
「で、その組織があるとすれば、君たちは入るのかな？」
薫の問いに茂は考えてみた。老人の接触がそういうったものの組織への勧誘なら、それは考えてみる価値があるだろう。
だけど今はこの学園に巣くう霊を退治するのが先決ではないだろうか。
「俺は入るな。俺、ヒーローに憧れてるし」章吾が言った。
「あたしはいいや。なんだか面倒そうだし。それにさ、その前にこっちは問題抱えてるわけじゃん。学校の悪霊、早いところなんとかしないといけないよね」
「だからさ、俺達の問題をその組織の問題にもできるんじゃないか？」
茂は今の章吾の発言で彼のいわんとしていることがわかった。茂も同じことを考えていたからだ。
「組織の人たちに学校の霊問題を解決してもらうってことだね」
「まあ、俺達も一緒に、だけど」
薫が手を叩く。
「仲間は多いほうがいいよ。この学校にだって、まだまだ能力者はいると思うけど、その組織に加入すれば一杯増えるかもしれないね」
まずは学校の霊をどうにかしないといけない。それは間違いないと茂は思う。
「本格的にあいつをここから追い出さないと。そろそろ次の獲物を見つける頃だ」章吾が真剣な口調で言う。
薫が真剣な表情で学校のほうを見ているのに茂は気付いた。普段

とは打って変わった彼女の表情の変化に茂は困惑した。
「薫さん、どうかしました？」
「うん……感じる。あいつの気配だ」
「小百合をこ、襲った奴か」
「勿論。移動してる。まずいな。誰か襲う気でいると思う」
「じゃあここで話してる暇ないってわけか」
章吾は立ち上がり、瑠香も立ち上がる。
「行くよ茂」瑠香が茂に言う。
茂は立ち上がる。
「行くなら急いだほうがいいけど、気をつけてね」
薫に手を振り、茂は章吾達に続いて屋上を降りた。

廊下から放たれる気配は普通ではないようだが、一般の生徒にはわからないようなプレッシャーかもしれない。勘のいい一部の生徒が、少し周囲の様子に違和感を覚えるだろうが、茂たちのようなスペシャルには異質が瞬時に感じ取られ、その中にいるだけで全身が凍り付くような気分だった。
まるで駄目だ。茂は足が震えていた。これが敵が放つプレッシャーだとすれば、戦える相手じゃない。
相手の力量を悟ることができるのはもしすかすると自分が成長した証なのかもしれないが……それでも、これならば以前のほうがまだ戦えたように思う。今の茂は蛇に睨まれた蛙のような気分だった。おそらくそれほどの差がある――。
「怖いか茂」章吾が言った。
「ああ。怖いよ」
「実は俺も怖い」
「章吾、行くのか？」
「無理だな。返り討ちにあう確立ほぼ百パー。勝負にならないだろう」
章吾と茂の霊を倒す能力の差はだいぶ開いているはずだ。その章

吾が話にならないと言っている。
「あたしもパス。ちょっと怖いよ」
瑠香もそう言うが、茂はどうすればいいのか、悩んだ。学校をさまよう悪霊は誰かを襲撃しようとしている。だからこそこんなにも敵意を露わにしているのだ。いや、もしかしたらもう襲われているのかもしれない。
ここで行かなければ、何のために自分は能力を持っているのか。結果はわかっているとしても、ここで行かなければ、男ではないのでは。
「くそっ、俺は行くよ！」
茂は駆けだした。全速力で、霊の気配を強く感じる方向へと向かっていく。おそらく近い。階段を下りたらすぐという所だろう。
背後に章吾も駆けていた。
「死ぬ気かよ！」
「死にたくはないさ！　だけど放ってはおけないだろ！」
階段近くで、下から悲鳴が聞こえた。女生徒の悲鳴だ。かなり大きい。
階段を一気に駆け下りる。そして、荒く息をつく。少し遅れて瑠香も降りてきた。
「自殺志願者だね。敵はもうすぐでしょ」
瑠香の言うとおり、気配は強い。
茂は天井を見た。そこに憎々しげな目でこちらを見つめる悪霊の姿があった。
茂は叫んですぐにその場から引いた。悪霊は少しの間だけ茂を見ていてが、やがて急に興味をなくしたような顔つきになり、それからふっと消えた。
「逃げたのかな？」茂が呟く。
「わからねぇ。もしかしたら、もう終わってしまったのかも」
「どういうことだよ」
「遅かったかもな」

茂は全身が震えていた。先ほどの悪霊の目のせいだろうか。恐ろしかった。しかし……。

悲鳴を聞きつけて連中は多かったが、誰の悲鳴なのかわからなかった。やがて、一年C組の中野愛子が行方不明になったという噂がたち、放課後近くには中野愛子がいなくなったのはほぼ確実だという事態になり、学校はパニックになった。悲鳴を聞いた者には愛子の声に似ていたと証言する者もいて、学校で行方不明事件が起きたという事実が確実なものになっていった。

茂は教室で放心状態だった。きっとあのまま悪霊を相手にしてもどうにもならなかった。そういうレベルではない存在だからだ。あれは一体どういうタイプの化け物なんだろうか。少なくとも、相当性質の悪い悪霊であることは確かだ。

茂は中野愛子のことを考えた。生徒の顔はよく知らないが、地味だが勉強熱心な生徒だったらしい。まだ十六歳。彼女はおそらく、帰ってこない。

茂は放課後、一人で霊を探した。霊を探し、やっつける。あいつらなんだ。あいつらが、人に取り憑く。そしてだんだんと人の精神を、肉体を蝕み、そして着々と力を蓄え、学校に巣くうような大悪霊に変わってしまう。茂はそんなことを許したくなかった。だってあれではあまりにも手がおえない。まるで人間はあいつらの餌のようなものだ。

売り地になっている空き地の中央に朧なる影が揺らめいている。茂は影に近付いていく。近付くにつれて影の警戒を感じる。霊の雛のようなこの存在を許してはならない。不愉快さ、憎しみを感じる。茂は怒りを感じていた。霊の内部に手を突っ込み、相手が滅びるように力を込める。

しかし霊は全く消え去ろうとしない。逆に、茂はさらに不快になり、霊から手を離す。

「なんでだよ！」茂は叫ぶ。
茂は叫ぶ。周囲に人はいないようだ。
「それでは駄目だよ」
老人の声。朝の老人の声だ。振り向くと、そうだった。達川国雄だ。
老人は穏やかな顔で近付いてきた。
「霊を倒したいんだろう？　怒りや憎しみの感情は霊を増幅させるだけだ。素人が負の感情で霊を消滅させることはできない。君がやっているのは浄化のやり方なんだ。これは一見簡単なようで技の中ではもっとも高度なものの一つなんだ」
「どうすればいいんです？」
「同じやり方なら、負の感情は捨て去ること。同じ霊を消滅させるイメージにしても、イメージを変えるんだ。そうだな、彼らが天国にでも行くように願うかのようなイメージを作るんだ。明るい日の日差しや、楽しいことを思いながら相手が消滅するようなイメージを手の先から送り込むような感じ。やってごらん。もう一度手を入れて」
茂は言われたように再び霊の内部に手を入れた。不愉快さが気持ち悪いが、老人の言われたようにやってみることにした。
天国に続く階段を想像する。霊がその階段を上り、段々と消えていくイメージ。一度消滅し、新たに、善なるものに作り替えられるような、そんなイメージを思い浮かべる。さらに楽しいことを思い浮かべる。思い浮かぶのは橘奈央の顔、それと川添薫の姿。彼女たちと喋っているときが茂の楽しいこと。
霊はいつの間にか消滅していて、茂は何もない空間に手をかざすような格好になっていた。手を引っ込める。
「そうだ。そんな感じだよ。まずまずだ」
「どうしてここにいると？」
「たまたまだよ。私は常に見回りをしていてね。君の気配が感じて、もしかしてと思ったわけだ。能力者の気配はよくわかる。君のよう

に潜在的に強力な能力者ならなおさらだよ」
「そうなんですか」
「実は君のような能力者を探していた。君のように潜在的な力を持つ者を開花させるのが私の趣味なのだよ。君を組織に加入させたいというのが本音だが、だがそれは成人してからでも遅くはない。君は何か今、本当に倒したいと切に願っている相手がいる。そしてそれが今の実力では伴わない」
「はあ」
この老人は俺をストーカーでもしたのだろうかと茂は疑った。
「私がその手助けをしてあげよう。君をコーチしてあげるよ」
「さいですか」
ちょっと状況を整理しようと茂は慌てて頭を落ち着かせた。
「ええって……俺を強くしたいってことですか？」
「そうだよ、茂君」
茂はどう答えて良いのか迷ったが、章吾の得意げな、自分を格下に見ている顔を思い浮かべた。実際章吾が茂を格下に見ていることはないのだが、茂はかなり負けず嫌いの少し鬱陶しいタイプの性格をしていた。
「いいでしょう。俺、あなたについていきますよ」

？

というわけで、茂はそのことを章吾達に早速話した。
「俺は潜在的に優れた霊能力者になるってその爺さん、言ってたよ」
「口車に乗せられたんじゃねえの」章吾が冷たい目をする。
章吾は嫉妬しているんだと茂は思った。それは当然だ。自分は天才的な才能を秘めているんだろうから。
だったら話は早い。とっととその能力を開花させて、学園に潜む幽霊をやっつけてやるんだ。
茂はその日ご機嫌だった。

茂は老人、達川国雄との特訓を開始した。夕方、二人は近所の商店街に行き、その周辺で零を見つけて、それらを浄化させるという作業を行った。それは章吾達とやっていることが同じように思えるが、少しだけ違っていた。まず、達川国雄は気の流れを茂に優しく、しかし長く時間をかけて教えた。国雄の言葉は茂にはわかりやすく、要点をよくまとめてあって、飲み込みの悪い茂にもほぼ理解できるものだった。
そして気の流れの次に霊と接触し、自分の気を相手に送り込むやり方を一から丁寧に教え、茂が間違うと訂正させた。茂が霊によって自分の体力が減じられるのを国雄は黙って見ていた。
「いつまでも霊に攻撃を許すな。何度もやっているだろう？　自分の陽の気を相手に送り込むんだ。陰の気を負かすほど、強い陽の気を」
茂はそういえば、と薫のことを思い出す。陽といえば陽気な薫だ。茂は自分の腕先に力が湧いてくるのを感じた。手の先が暖かい。これが、陽の気なのだろうか。耐えきれなくなったのか、霊が消滅した。
「そうだ！」

薫は自分にとって守護天使だ。守護霊なんかじゃない。茂は思った。そうだ。何か裏がある……。霊を倒したときの高揚感を愉しみつつも、茂は薫が何故死んだのかを考えた。あんなに底抜けに明るい人が自殺だなんて信じられない。絶対に信じない。

「――で、お前は強くなった。まあ、自信満々って態度だもんな」
昼の屋上で、章吾はどこか気に入らなそうな目で茂を見つめる。
「嫉妬しなくてもいいじゃない。俺は霊退治に関して少しは才能があるかもしれない。それでも、章吾や遙香のほうがまだまだ強い」
「当たり前だろ、この包茎が」遙香は茂を睨みつけた。
「包茎の何が悪い。男子の大半は仮性包茎なんだ。失礼しちゃうよ」
茂は気を悪くした、という顔を装って飯を食べる。
「俺は違うけどな」章吾が言う。
「嘘つけ」遙香がすかさず言う。
「何だお前、疑うのか」
「じゃあ見せてみろよ」そういった遙香の顔が赤らんだ。失言をした、という感じだ。
「変態」茂と章吾の二人が同時に言った。しかし茂には遙香の赤らめた顔が気になった。あんな発言で照れるような女じゃないと思うのだが。
「三人とも成長してるね」
薫が唐突に、まじまじと茂達の顔を見ながら言った。
「うん。なんだか霊力みたいなのが上がってる。茂君もだけど、章吾も遙香も上がってるね。」
章吾が少し顔を赤らめて顔を俯かせる。遙香も似たような仕草をする。
「なんだ、二人とも隠れて強化してたのか」茂が言う。
「うっせえ。俺だってあの悪霊には現状勝てないってわかってるからな」
別に隠したり照れたりするものでもないだろうにと茂は思った。

その時点ではよくわからなかった。だがどことなく違和感を感じたのは確かだ。
「霊能力同士、いや、霊を倒すのは重要なことだからね」遙香がよくわからない発言をする。隣で章吾が遙香を睨みつけたのが茂には引っかかった。
「まあ、三人とも気をつけたほうがいいよ。あいつは今活動を停止しているように見える……だけど、動いているよ。今も獲物を狙っている。近いうちに誰かやられると思う」
薫の言葉に、三人は黙りこくった。
ところで二人ともどうしてまだ顔が赤いのだろう。茂にはそれが気になって、気に入らなかった。
章吾が立ち上がって薫の左肩に手を置く。薫は女にしては高身長だが章吾には敵わない。
「安心しろよ薫。あいつは俺がやっつける」
茂は章吾に嫉妬した。自分より背が高い章吾。見た感じ不良なのに不良臭さを感じない章吾。そして薫の肩に簡単に手を置いてあんな台詞を吐く。許せない。
「俺だって」
茂は立ち上がると、薫の右肩に手を置いた。
「絶対にあいつをやっつけるよ、薫さん」
「頑張ってね。茂君ならできる。あたし、信頼してるから」
茂は薫がもう少し照れた様子を期待していたのだが、薫は全く動じることなく、にっこりとした微笑みで茂の左手を握って答えたので茂が顔を赤らめることになった。
「う、うん」
「お前、だせえな」章吾が呆れる。
「薫に優しいんだね」遙香が章吾に恨めしそうな目を向ける。
「馬鹿か」
茂はなんだろうなと最初に思った違和を、とりあえず無視することにした。

茂は帰り道、霊たちを八匹退治し、自分の強さのレベルが上がったことにも驚いたが霊の多さにも驚いた。一般人は彼らに気付かない。自分のように非凡者（茂は自分のことをそう呼んでいた）ですら、意識しないとわからない。だからこうして、今まで霊のことなど知らずに生きてきたわけだ。

だけど待てよ……。昔、霊を見た気がする。三軒隣の少女が突然死するという悲劇があったっけ。死因はわからない。いじめはあったらしいが、軽度だと聞いた。軽度のいじめというのが茂には想像つかないし、そんな判断を下した学校側にも強い怒りを覚えたことを思い出した。小学低学年の頃はまだ保育園に通っていた彼女を見つけると、一緒に遊んでやったものだった。彼女はその頃友人に恵まれておらず、いつも一人だった。だから茂を見つけると喜んで駆け寄ってくるのだ。そんな幼女を茂は可愛らしく思い、公園で砂遊びやおままごとに付き合ってやったものだ。ままごとほどつまらないものはなかったが。

少女が死んだのは彼女が小学三年生のときだ。あまりにも早すぎる死だった。茂は愕然としたという記憶がある。

何で忘れていたのだろう。あまりにも辛い思い出だからだろうか。少女を好いていた。恋愛とは別にだ。妹のように感じていたのだ。

そしてその数日後、茂は少女を見た。夜の公園だ。どうして公園にいたのか、茂にはわからない。誘われるように夜の公園に行き、砂遊びをする彼女を見たのだ。そして、彼女はどこか虚ろな目で茂を見ると、一緒に遊ぼうと言ったのだ。茂はそのとき、死んだ霊と遊んだのだが、茂には霊と遊んだという認識はなく、少女と遊んだという記憶があるのみだった。だが現に彼女は数日前に死んだのだ。遺体も確認している。散々遊んでやった。ままごともやった。

「なんで一緒に遊んでくれなくなっちゃったの？」

少女は唐突にそう言うと、目から涙を流し、そしてふっと消えた。煙よりも早く。

そんな記憶だった。三軒隣だ。遊ぼうと思えば遊べたかもしれない。昔は部屋にまでいって人形ごっこに付き合ったりした。だが茂にとっては遊んでやっているという思いがあったのだが、今となってはその共に遊んだ記憶がとても楽しいものに思えて……。

茂は滂沱の涙を流した。少女が消えたときの茂もそうだし、それを思い出した今の茂もそうだった。

あれは……いわゆる章吾の言う霊とは違う。本当の霊だ。悪霊ではない。残留思念でもない。はっきりと意識を持ち、自分に対して恨み言のようなことをいう、人であったものが変わったものなのだ。

だけどどうして死んでからそんなことを言うのだろう。生きているときに、何か言ってくれたら対処もできただろうに。

いや、違う。少女は恨み言を言いにきたわけではない。一緒にまた、昔のように遊びたかったんだ。そして、一緒に遊べなくなってしまう人の、状況の移ろいを呪ったのだろう。

茂はしばらく泣いていた。忘れたい思い出だったのだろうか？

それはわかる。ただただ、やりきれないだけだ。

「なにを泣く、少年よ」

目の前に、微笑をたたえた達川国雄が現れた。

「師匠……」

「師匠？」

国雄は顔が微笑から戸惑いに変わった。

「霊というのは色々ある。その友人が言うような霊もそうだし、実際に恨みを持って人間に害をなすような一般的に悪霊と呼ばれる存在もいるわけだ。魂というものが存在するかどうかという話になるので、まあそれはおいおい、な。さあ、今日も幽霊退治だ」

それから一月が経った。昼休みに、もう一人の行方不明者が出るのはそろそろだと薫が警告したとき、茂は覚悟を決めた。

「俺、倒すよ。今日の放課後。あの悪霊野郎をぶっ殺してやる」

「霊ならもう死んでるんじゃないのか」

そう言ったのは章吾でも瑠香でも薫でもなかった。

古屋正樹が階段の近くにいた。

章吾が彼の前に立つ。

「正樹お前……事情通ですって面(つら)してるな」

「まあな章吾。お前たちのことはよく知ってるよ」正樹は右目を瞑ってそう言った。

「その子もあたしが見えるんだよ」

薫が正樹の手を握った。

「あんたまだ成仏できないのかよ」

「おかげさまでね」

「いや、その返答はおかしい……」

茂は猛烈に嫉妬していた。薫さんの手が他の、汚れた、男子生徒に触れられている。許せない。古屋正樹。唾棄すべき存在であるのは間違いない。

「うん、転校生。ええと、茂だっけ。俺は古屋正樹って前自己紹介したっけ。あのさ、悪霊退治するんだろ。俺も仲間に入れてくれよ」

「消えろ。お前と話すことなんて何もない」

正樹にとってこの返事は意外だったようで、他の連中の目を見て

救いを求めた。
「おい茂、どうしたんだよ。お仲間が増えるってんだからいいじゃねえか」章吾が茂を宥める。
「しかしあんたがねぇ。どうりであたしのテレパスが効かないわけだ」瑠香がじろじろと正樹を見る。
「ああ。俺はブロックが完璧なんだ。悪霊の呪いだって跳ね返してしまえるだろうさ。だから俺を仲間に入れれば重宝すると思うぜ」
「自分で言ってりゃあ世話ないよねぇ」
「大丈夫だよ瑠香。あたしが保証する。古屋君はきっと役に立つよ」薫が正樹の肩を触って言った。
「霊なんかに保証されたくないけどね」
正樹が言ったが、瑠香にすぐ膝を蹴られた。
「友達の悪口は許さないから」
まるで人を殺すかのように正樹を睨みつけると、瑠香は座った。正樹は痛そうに膝を撫でている。
そして瑠香以上に腹が立ったのが茂だった。瑠香が膝を蹴らなければ最近身につけた呪術で呪っていたかもしれない。
「とにかく、この四人でやってみようじゃねえか、茂？　今日やるんだろ。ちょうど明日は休日。時間は気にしなくていい。お誂えかもな」
茂は風を全身に受けながら、頷いた。
「ところで古屋、あんたなんで今まで静観してたの」瑠香が尋ねた。
「今はいいだろ芳賀。また後で説明してやるよ。もっとも俺が打ち明けなかった理由の一つはお前らに話しても無駄だと思ってたからだけどね」
正樹は再び膝を蹴られた。
茂は決意する。今日の放課後、悪霊と対峙し、退治する。
放課後までに、そのための準備をしておく必要があった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5009y/

学園レイ

2011年12月31日02時45分発行